氏名（本籍）	小川有紀（オガワユキ）（神奈川県）
学位の種類	博士（音楽）
学位記番号	博音第35号
学位授与年月日	平成11年3月25日
学位論文等題目	〈論　文〉フランス・オルガンの再興 －19世紀中葉、世俗化に直面して－ 〈演奏曲目〉19世紀中葉のフランス・オルガン音楽

論文等審査委員

総合主査	東京芸術大学	教授	（音楽学部）	廣野嗣雄
論文審査（主査）	〃	〃	（〃）	角倉一朗
（副査）	〃	〃	（〃）	廣野嗣雄
（〃）	〃	〃	（〃）	永冨正之
（〃）	〃	助教授	（〃）	鈴木雅明
（〃）	くらしき作陽大学	教授	（食文化学部）	馬淵久夫
演奏審査（主査）	東京芸術大学	教授	（音楽学部）	廣野嗣雄
（副査）	〃	〃	（〃）	角倉一朗
（〃）	〃	〃	（〃）	永冨正之
（〃）	〃	助教授	（〃）	鈴木雅明
（〃）	くらしき作陽大学	教授	（食文化学部）	馬淵久夫

（論文内容の要旨）

本論文では、19世紀中葉のフランス・オルガン音楽に焦点をあてている。この時代の特徴としては、オルガンが、祭式以外の場面で用いられるようになったこと（世俗化）、また、オルガン音楽の趣味が二分され、識者たちの間で論争が巻き起こったことがあげられる。これらの現象がオルガン音楽に与えた影響を分析することで、フランス・オルガン史におけるこの時代の役割を明らかにし、その意義を再認識することが、本論文の目的である。

第一章では、フランス革命によって破壊された楽器が再建される過程を記す。革命後の楽器再建には、二つの特徴が見られる。第一の特徴としては、ドラマティックなオーケストラの音楽を理想に、楽器が改革されたことがあげられる。この改革により完成した楽器を、オルグ・サンフォニックと呼ぶ。第二の特徴としては、このオルグ・サンフォニックと同様の表現力を身につけたオルグ・エクスプレシフ－アンシュ・リーブル（フリー・リード）を利用した楽器で、ハルモニウムはその一種である－が開発されたことがあげられる。この楽器は、オルガン音楽の領域を教会から外へと拡張し、オルガン人口を増加させることに貢献した。

第二章では、19世紀中葉のオルガン界の全体像を述べる。この時代のオルガニストは、大きく

二つのグループに分けることができる。一方は、「サヴァン；学識深い」「セヴェール；厳しい」という肩書きを与えられたオルガニストの一群で、彼らは、J.S.バッハを頂点とするドイツの音楽や、F.クープランの芸術に学ぶという、フェティスをはじめとする音楽著述家たちの提案に同調していた。もう一方は、モレロにより「さまざまに音を組み合わせることによって得る演奏効果を追求している」と評された一群で、軽い、娯楽的な音楽を好んだのが特徴である。前者にはボエリ、ブノワ、フランクなどが、後者にはルフェビュール＝ヴェリ、シモンなどがいた。

第三章では、19世紀初頭から中葉にかけてのレジストレーションの変遷を分析する。フランス革命後は、新しい音色が誕生し、古典期のレジストレーションは消失する傾向にあった。しかし、19世紀中葉になると、古典的なレジストレーションが再び用いられるようになる。この変遷の要因として、先の音楽著述家たちによるF.クープランの再評価が考えられる。

第四章では、19世紀初頭から中葉にかけて出版されたオルガン教本を分析する。テクニックが変遷する過程を把握し、19世紀中葉から現代に至るフランス・オルガン奏法の基礎となった、レメンスのレガート奏法を再考することが目的である。分析の結果、左足の爪先のみしか用いていなかったフランスのオルガニストが、両足の爪先とかかとを用いるドイツ式のペダル・テクニックを習得する経緯が検証された。また、レメンスの教本にはレガートのためのテクニックしか解説されていないが、実際には、デタッシェを多少用いて演奏を行っていたのではないかと推察された。さらに、フランス・オルガン界においては、レガート指向が1840年代以降に顕著となっていることや、レメンスの教本には、先に述べた音楽著述家たちの影響が色濃くあらわれていること等が明らかとなった。

第五章では、音楽や作品の変遷を探究する。19世紀中葉は、オルガン音楽に自由がもたらされた時代である。特に、教会内において、通常の祭式とは全く関係のない催し－オルガン演奏会－が開かれたことは画期的であった。オルガンは典礼の制約から解放され、従来とは異なる形態をもつ新しい作品が誕生した。しかし、その自由は、娯楽性のみを追求した浅薄な音楽の横行をも許してしまった。この状況を打破しようとしたのが、音楽著述家たちであり、彼らの主張は、同時代のオルガニストたちのレジストレーションや奏法、作品に甚大な影響を与えていた。

終章では、19世紀中葉を現代から眺め、フランス・オルガン史におけるこの時代の役割を明らかにする。演奏会の開催や聴衆層の変化によって、19世紀中葉のオルガン音楽は二分され、識者の間で論争が繰り返された。しかしその論争が、オルガン音楽の再興と発展を促し、現代に至るフランス・オルガン楽派の源となったのである。その意味で、フランス・オルガン史における19世紀中葉の存在は極めて重要であるといえよう。